ひろしまレポート

第33回広島平和記念式典参加事業

松　　本　　市

広島の平和記念公園内に設置されている「平和の灯（ともしび）」

「平和の灯」は、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という趣旨で１９６４年8月１日に設置され、全国１２宗派から寄せられた「宗教の火」と溶鉱炉などの全国の工場施設から届けられた「産業の火」が、１９４５年8月6日生まれの７人の広島の乙女により点火されました。

目　　次

○ヒロシマの願い

○レポート

言葉と風化	清水中学校２年	新　堀　大　和	‥‥　１
悲劇をくり返さないために	鎌田中学校２年	岡　　陽向子	‥‥　３
日々の繰り返しそれが幸せ	丸ノ内中学校２年	村　松　陽　佳	‥‥　４
広島の風を肌で感じて	旭町中学校２年	原　本　航　輔	‥‥　５
過去を見つめ、未来を変える	松島中学校２年	大　澤　日　向	‥‥　６
広島を訪れてみて感じたこと	高綱中学校２年	菊　池　柚　音	‥‥　７
平和への一歩	菅野中学校２年	望　月　　蓮	‥‥　８
戦争は人を変えてしまう	筑摩野中学校２年	柳　澤　新　汰	‥‥　９
７８年前の悲劇	山辺中学校２年	福　田　未　菜	‥‥１０
戦争を忘れない	開成中学校２年	多　山　宇　芽	‥‥１１
ヒロシマを繰り返させない	女鳥羽中学校２年	梅　本　実　咲	‥‥１２
私たちの使命	明善中学校２年	佐藤根　桜　来	‥‥１３
私が見た原爆の記録	信明中学校２年	西　出　莉　緒	‥‥１４
平和な世界へ	会田中学校２年	横　内　奏　汰	‥‥１５
言葉だけで判断してはいけない	大野川中学校２年	関　沢　音　愛	‥‥１６
戦争のない世界へ	梓川中学校２年	安　井　優　那	‥‥１７
考えて　考えて	波田中学校２年	奥　原　崇　暁	‥‥１８
広島の平和学習に参加して	鉢盛中学校２年	松　田　七　海	‥‥１９
和とＰＥＡＣＥ	信大附属松本中学校２年	森　木　和　奈	‥‥２０
ひろしまレポート	才教学園中学校２年	松　井　那　奈	‥‥２１
平和の灯が消えるとき	松本秀峰中等教育学校２年	古　田　真　琴	‥‥２２
真実と向き合う	松本国際中学校２年	清　水　　蓮	‥‥２３
広島を再び訪れて	松本ユース平和ネットワーク	大　津　柚稀乃	‥‥２４
広島で戦争について学んで	松本ユース平和ネットワーク	市　毛　鞠　花	‥‥２５
静寂の都での願い	松本ユース平和ネットワーク	武　田　朋　己	‥‥２６

○写真記録　‥‥２８

○広島平和記念式典

　　平和への誓い　‥‥３１

　　平和宣言　‥‥３２

○旅の日程　‥‥３４

○参加者一覧　‥‥３５

※掲載のレポートについては、できるだけ本人の作文を尊重しています。

ヒロシマの願い

The Prayer of Hiroshima

「原爆(げんばく)に会(お)うた」と、被爆(ひばく)した人たちは言います。 一瞬の破壊、あまりに多くの死、大切な家族さえ救えなかった苦しみ＿＿＿言葉では表現しきれない出来事に「出会って」しまったからでしょう。あの８月６日とそれに続く日々は、「思い出すことさえつらい」ことです。 被爆者はその思いを乗りこえて自分の体験を語り伝え、 再び核兵器を使ってはいけないと、広島の地から訴えてきました。
「ヒロシマ」は世界共通の願いと結びあい、 平和を実現したいといつも願っています。

Hibakusya say simply, “I met with the A-bomb.” Perhaps they use this expression because the event they “met with” defies description an instant of massive destruction, mind-numbing death and injury, and the grief of watching helplessly as family members, relatives, friends, and neighbors died in agony. They also say, “It’s painful even to remember.” The A-bomb witnesses have overcome that pain and are passing on their experiences of that day. They feel duty bound to tell the world why nuclear weapons must never be used again.
The continual prayer of the A-bombed City Hiroshima is to unite humankind toward our common goal, genuine and lasting world peace.

（広島平和記念資料館　収蔵品より）

言葉と風化

清水中学校２年
新堀　大和

「あれは火傷なんて言葉じゃ表せない。」

それが、今回の平和学習で、一番記憶に残っている言葉です。

僕は、広島に平和学習に行くことができると聞いて、心を踊らせました。「戦争」「ミサイル」「核」といった言葉が身近なものとなった今、７８年前の広島で何が起こったのかを詳しく知りたいと思ったからです。

初日、被爆体験伝承者の橘さんからお話をお聞きしました。原爆が投下されると、人々は全身に大火傷を負い、建物は全壊。あたり一面は焦土と化したそうです。信じられません。続けて、橘さんはこう言います。

「今、私は火傷という言葉を使ったけれど、あれは火傷なんて言葉じゃ表せない。だから、自分の頭で、想像してみてほしい。」

僕はこの言葉に衝撃を受けました。原爆によって広島の人たちが負った『火傷』と、いわゆる火傷は、イメージすべきものが全く違う。それなのに、原爆が想像を絶する破壊力だったから、それを的確に表す言葉がない。橘さんは、当てはめた言葉によってイメージが矮小化され、風化していくのを恐れているのだ、と思いました。

歴史は繰り返す。それは、過去の出来事はいずれ風化してしまうからなのだと思います。凄惨な戦争を憎む人は多いと思いますが、それでも、世界ではウクライナ侵攻をはじめとした戦争が今も続いています。

争いによる利益があるのは事実でしょう。人間に、他人を羨んだり妬んだりする心があるのも事実でしょう。ですが、人間は想像力も持っています。助けたり、慰めたり、守ったり、人を傷つける以外のこともたくさんできます。僕たちは、人間のそんな性質と、今の社会構造との組み合わせを認識し、かみ合わせの悪いところをしっかり捉えておく必要があるのだと思います。

戦争は国家間の争いです。どんなに戦争を厭っていても、国が戦争を始めれば、僕たちはもう当事者です。しかも、戦争は突発的に起こります。太平洋戦争の開戦、真珠湾攻撃も国民には知らされていませんでした。

ただ、振り返れば予兆となる出来事はいくつも起こっていたのではないでしょうか。始まった戦争を止めるのは難しくても、戦争に巻き込まれないための国民感情を持つことは不可能でないかもしれません。そのためにも、戦争を風化させないことは大切なのだと思います。

橘さんの言葉に従って、広島の『火傷』の実際を想像してみました。今の僕の語彙では、それを友人に的確に伝えることはできません。強

調の言葉をいくら重ねても嘘っぽくなり、違うものを思い描かせてしまいそうです。

　この平和学習は、新しいことを知るだけでなく、自分の至らないところを知る機会にもなりました。それに気づけたことで、やはり広島に行けたことはとても有意義だったと感じています。

　自分がもっと知識を持ち、言葉を広げていくこと。そして政治に関心を持ち、自分の中に価値判断基準を定めておくこと。流されない強さと鋭さを身につけておくこと。僕や友人や子や孫が、寝耳に水で戦争に巻き込まれてしまわないためにも、それが大切なのだと考えています。中２の今は出発地点。まずすべきことは……やはり勉強……なのでしょう。

悲劇をくり返さないために

鎌田中学校２年
岡　陽向子

１９４５年、８月６日、午前８時１５分、一発の原子爆弾が投下されました。その日も広島に住んでいた人たちの何気ない日常が始まろうとしていました。その矢先に、原子爆弾が投下され、日常が奪われてしまったのです。

私は、原爆が投下されて７８年後の広島に行ってきました。当時、原爆が投下されたところは、１００年草木が生えないと言われていたそうです。しかし、７８年後の広島は、松本と何も変わりのない、美しい町がありました。昔、ここが建物や草木のない焼け野原だったなんて想像することもできませんでした。

広島では、初日に被爆体験伝承者の橘さんに、３人の方の被爆体験のお話をお聞きしました。３人の方のお話はどれも心の打たれるお話でした。ある方は、仕事中に、ある方は海軍の訓練の休憩中に、皆さんがそれぞれちがう立場、ちがう場所で被爆したそうです。しかし、３人の方の被爆直後に目に入ったものは、同じでした。「急に空がピカッと光った。」そのときの光は、空にもう１つの太陽が現れたような、そんな光だったそうです。その光が見えた後、ものすごい力に押されて、体が吹き飛ばされ、つづいて熱が押し寄せて大火傷を負いました。そんな人たちが辺りには溢(あふ)れかえっていました。このときの大火傷は、皮膚がただれて剥がれ落ち、ベロベロとぶら下がっている状態のものです。これは、人間が感じる中で最も苦しい痛みだそうです。その他にも、水を求めて川へ飛び込み、そのまま息絶えた人々が水面に浮いていたり、黒こげになって判別のできない自分の子どものようなものを抱いた両親だったり、原爆が炸裂した後、辺りはものすごく悲惨なものでした。

原爆の爆風や熱線から生き残っても、放射線による後遺症に苦しんだり、被爆時に母親のお腹の中にいて生まれたときから障がいを持っていたり、被爆した直後だけでなく、何年か経った後に症状が出たりと、毎日不安を抱えて過ごしている人が今もいます。

そんな被害をもたらす核兵器が今も世界には存在しており、ロシアによるウクライナへの侵攻は未だに続いていて、終わる気配も感じられません。しかも、ロシアは核兵器の使用もちらつかせています。１９４５年８月６日のあの日、広島で起こった悲劇が今、この瞬間にも繰り返されようとしています。広島での悲劇が起こったという事実を変えることはできません。なのでこの事実を一人一人がしっかりと受け止め、悲劇を繰り返さないために考え、行動していくことが大切です。

私は、広島に行って感じたことを多くの人に伝えていきたいです。私の話を聞いた人がそれぞれ自分の気持ちを持って考えてくれると広島での悲劇が繰り返されないと思います。私もこれからは、自分自身に何が出来るのか考えていきたいです。

日々の繰り返しそれが幸せ

丸ノ内中学校２年
村松　陽佳

今回、私は広島平和記念式典参加事業に出席しました。特に、式典では二度と広島の惨事を繰り返してはならないと世界に語る責任と覚悟を感じました。

７８年前の８月６日。１つの原子爆弾が一瞬にして広島の街の幸福と日常を奪いました。原子爆弾が落とされる前の広島はいろいろな建物が立ち並び、活気あふれる街でした。原子爆弾投下後に瓦礫(がれき)が重なり、人の消えた街の写真を見て、胸が痛み、原爆の恐ろしさを実感しました。また、人々が何年もかけて築きあげてきた建物や生活が一瞬で壊されたことに憤りを感じました。

私たちは１日目に被爆体験伝承者の橘光生さんに、ある被爆者の被爆体験について話を伺いました。その少女は、外での作業中に被爆し、大火傷を負いました。病院へ運ばれ看護を受けましたが、その甲斐なく亡くなってしまいました。彼女が最後にいった言葉は看護してくれた女性に向けた『おばちゃん手を握らせて』でした。私は最期さえ家族に会うこともできず亡くなった少女の気持ちを思うととても切なくなりました。

街では投下時に外作業をしていた私と同じくらいの歳の学生達が原子爆弾によって亡くなりました。その子供達は戦争などなければ今でも元気に暮らしていたかもしれません。楽しいもののはずだったその子供達の未来が戦争によって潰されてしまいました。

広島でこのような酷い惨事が起きたにも関わらず、未だにウクライナやロシア、アフガニスタンなどの国々ではそのようなことが繰り返されています。人々の戦争での苦しみは残されたままです。この地球上で戦争や紛争は行われ続けています。

しかし、一人一人が平和を望み、求めていけば未来はよい方向に変えられます。毎日、家族と話したり、ご飯を美味しく食べたり、学校に行ったりできることは本当に幸せなことだと気づくことができました。私たちにとっての一番の幸せは日々の生活を当たり前に送れることだと気づくことができれば、戦争も紛争もなくなるはずです。

私に今できることは、人々を身体的にも精神的にも深く傷つける原子爆弾の恐ろしさ、平和の尊さ、日々の生活の大切さを人々に伝えることです。

私は将来、人々に思いを届けられる特派員になりたいと思っています。特派員になることができたら、世界中の人が幸せに過ごせる世界になるように今回の広島の平和学習で得た平和への思いを発信していきます。

広島の風を肌で感じて

旭町中学校２年
原本　航輔

「８月６日」この日は広島にとって特別な１日です。僕はその８月６日を含め２泊３日で広島を訪れました。原爆ドームの周辺は７８年前に原爆が落ちた場所とは思えないくらいきれいでした。本当にこの広島に原爆が落ちたのだろうか、そう思いながら３日間を過ごし戦争や平和について学びました。

まず被爆体験伝承者の橘さんから、鈴木さんと細川さんの被爆体験記を伺いました。鈴木さんは当時１６歳で、兵隊として江田島で海の特攻の訓練をしていたとき被爆しました。「ドーン」と宇宙のすみずみまで響くような大音響で、煙は天を突き刺すような悪魔のキノコ雲だったそうです。上官らと一緒に広島市に行き、死体を焼いたそうです。多くの人を助けられなくて大変後悔しているとのことでした。細川さんは、当時１７歳の会社員で職場の４階の自分の机で被爆しました。川には真っ黒な人がたくさんいて焼けて膨れ上がった遺体がそこら中にありました。突然焼けた人が「水をくれ」と言ってきましたが、あげると死んでしまうと思いあげませんでした。死ぬ前くらい水をあげればよかったと後悔しているそうです。後に本を出版しますが出版するまで被爆体験を語ることはしませんでした。「ただただ忘れたかった。」と話しています。橘さんは、本当は言葉にできないくらいの熱なのだから、やけどという言葉だけで原爆の熱さを表現しないでほしいとおっしゃっていました。

原爆資料館では、想像を絶するたくさんの展示品がありました。時間が８時１５分のまま止まった時計、ボロボロになった服、黒く形が変わった三輪車、座っていた人が影になった石段。数多くの展示品を見て言葉では言い表せない気持ちになりました。

大和ミュージアムや江田島旧海軍兵学校では戦艦や特攻隊員の遺書などがあり強く胸を打たれました。

僕は平和式典で核兵器のない世界を祈りました。広島で過ごし平和について考え、原爆や戦争の苦しみ、悲しみにふれて絶対に戦争を起こしてはならない、核兵器を廃絶して欲しいと思いました。僕たちは原爆の熱さ、辛さ、苦しさなど、すべては分かりません。しかし、今回広島の風を肌で感じ、当時の人々の思いに少し近づけたかもしれません。今回学んだことをそのままにしておくのではなく発信していくことが大切だと思います。また、今回は広島に行きましたが、戦争や平和にかかわることは身近にもその他にもたくさんあります。世界で唯一の被爆国の一員として、これからも平和についての学びを止めず、自分なりにできることを探していきたいです。

過去を見つめ、未来を変える

松島中学校２年
大澤　日向

私は広島に行き、ある２つのことに世界中で起きている紛争、ロシアのウクライナ侵攻についてや自分達が生きる未来について自分が考えるべきことが見えてきました。

１つは広島平和記念資料館で見た、たくさんの資料です。ボロボロになった衣服、高熱で溶かされたビンや鉄、人影の石、そして原爆により亡くなった方が直前まで身につけていた物。写真や絵からも当時の様子がよく分かり、強い恐怖心を感じるとともに、なんの罪もない人々が、ただ「原爆を落とすのに適した条件の地域」というだけでこんな目に遭う必要はあったのか、という怒りが込み上げてきました。

もし、このような気持ちを世界中に共有し、戦争や原子爆弾の悲惨さを理解し合えたのなら、今起こっているロシアのウクライナ侵攻のような「戦争」という手段をとらずに、もっと平和な、誰も傷つかない方法をとることが出来ると思います。

しかし、なかなかそうとはいきません。テレビでは戦争などにより苦しむ人々が映し出されます。同年代の子供たちが不安で身を寄せ合っている姿が映し出されます。なのに私はただだまって見ているだけで何もしていません。なので、これからは「情報」として見るのではなく「同年代の子供達が苦しんでいる」「自分がこの立場だったら」という目線で見て、今、自分は何をすべきなのか、まだよく分からないのですが、小さなことからでも自分で考えて行動に移していきたいです。

２つ目は江田島の教育参考館で読んだ特攻隊員達の遺書です。

私はそれらを読み、きっとものすごい恐怖とか、本当は行きたくない、とか思っていたと思うのに内容はそんなことに少しもふれず、家族への言葉などが書いてあり、正直とても驚きました。

しかし、当時の彼らにとっては特攻隊として出撃することが国のため、と信じていて家族を後悔させないための言葉だったのだと、改めて感じました。

私は教育参考館を訪れるまでこのようなことはほとんど考えたこともよく知ることもありませんでした。きっとまだそういう人達がたくさんいると思います。なので私はたくさんの人に知ってほしいです。なぜなら過去があっての今だと思いますし、知らなければ同じことをまたくり返してしまう、そう私は思うからです。

私はこの２つのことに限らず、３日間を通して、過去を知り次は何が出来るのかということを深く考えました。

「平和」を語る前に世界中が「平和」になるために何ができるか考えませんか。

広島を訪れてみて感じたこと

高綱中学校２年
菊池　柚音

私は８月５日～７日にかけて初めて広島に行きました。原子爆弾通称「リトルボーイ」が広島に落とされてから７８年が経った今、広島の町並はたくさんの木々が生い茂り高いビルが立ち並ぶ活気あふれる町となっていました。原爆ドームは枠組のみ残っていて本当にこの場所に原爆が落とされたんだなと思い知らされる建物でした。原爆は１９４５年８月６日８時１５分１７秒に落とされました。上空９，６００mで落下、６００m上空で爆発しました。落としてから爆発まで４３秒間あったそうです。もし上空９，６００mの地点で気づいたとしても４３秒間もの短い時間で遠くに逃げきれる訳がないと思いました。

次に広島平和記念資料館はとても衝撃的な場所でした。その場所は７８年前の風景がそのまま残っている感じでした。完全に焼けきってしまった町並。建物が全てくずれ落ちてしまっている風景。人が焼けて影になってしまっている石像。子供たちの遺書、遺品。残された人の想い。焼けてしまった人の写真。治療中の子供の写真。被爆から７年後に発掘された遺骨。悲惨な物がいっぱいで胸が締め付けられるような感じでした。

原子爆弾は熱で死んでしまう他に放射線をあびてしまって亡くなってしまう方や後遺症が残ってしまい周りからの差別、イジメなど精神的苦痛を引き起こす人も多かったです。

私たちは平和記念式典に参加することができました。広島の人々の想い、願い。平和宣言。を聞くことができました。この式典には各国から来たたくさんの人がいました。私はこんなにも世界には平和を願っている人がいることを知ることができました。

私たちは被爆体験伝承講話というものを聞くことができました。今現在被爆者ご本人からお話を聞くというのは大変難しいそうです。ご高齢で話すことが困難であったり施設などに入っていたりして聞けないです。だから私は被爆体験伝承者という人のことを今回初めて知ることができました。伝承者の方は３名の被爆者の話をしてくれました。私は聞いている時これが昔の日本で本当に起きた出来事なんだなと思いました。

私たちがこれから生きていく中で大切にしなければいけないと思ったのはまずイジメ、差別をなくさなければいけないと思いました。私たちが想いやりの心を一人一人が持ち続けることが平和に近づく第一歩になるのではないかと私は考えました。

平和への一歩

菅野中学校２年
望月　蓮

まず、はじめにみなさんが「平和」だと思うことは何でしょうか。僕は日常生活だと思います。しかし、広島ではある日一発の原子爆弾が全ての「平和」を奪い去りました。僕は実際に行って見てきました。

ぼくは８月５日～７日に広島へ行ってきました。広島に着いて初めに思ったことは、本当にこの場所で７８年前に原子爆弾が落ちたのかと写真などで見た風景と全然違かったので実感がわきませんでした。しかし、原子爆弾が広島に落ちたのは本当の事実であり、よく見ると原爆の爪痕は色々な所に残っています。

被爆体験伝承者の橘さんから被爆者の細川さんと鈴木さんの２人について話を聞きました。細川さんは会社のビルで被爆しました。ガラスや人や机が飛び散って血だらけになっていたそうです。幸い細川さんは柱に守られ同僚と外へ出ました。外では真っ黒な人がたくさんいて「水がほしい」と言われたそうですが、昔は水をあげると悪化すると言われあげられなかったそうです。細川さんはこの事を後になってとても後悔したそうです。一夜明けて実家に戻りました。妹の顔だけはきれいだった遺体があったそうです。軍人に助けられたが死んでしまい最後の言葉は看護師さんに向かって「おばちゃん、手をにぎらせて。」でした。細川さんはその後妹の日記を元に本を書きました。読み直すのが辛くて悲しかったそうです。それまで原爆の事を言うことがなくただただ忘れたかったという言葉が僕の心に残りました。

鈴木さんは軍人で朝食を食べている時、被爆しました。宇宙のすみずみまでも大きい音、鈴木さんはそう感じたそうです。号令がかかり急いで救援しに行きました。倒れた家、傾いた寺、たくさんの死体があり、防火水そうの水を求めて２ｍくらい積み重なっていたそうです。救援をするというより遺体を焼却するという作業をしていました。路地を走っていると女性から「兵隊さん、助けて」女性の後ろは炎で１、２秒頭を回転させました。しかしそこから走り去ってしまったそうです。このことを今でも後悔を細川さんはしています。何年もあの地獄の様な光景が離れないと聞きました。

このお二人のお話からどんなに心に傷をつけたかどんなに町を破壊したのかというのが伝わってきます。戦争は悲しみを生み両国にとって被害をたくさん受けます。今でもウクライナや各地で紛争が起きています。世界が平和になるためには、戦争をやめてみんなが当たり前の日常を得ること、お互いの意見を分かち合うことが大切です。この中でも意見を分かち合うということはいつもの生活でもできることです。ぜひ平和への一歩をふみ出して下さい。

戦争は人を変えてしまう

筑摩野中学校２年
柳澤　新汰

僕は、筑摩野中学校の代表として広島を訪問させていただきました。僕は「戦争のおそろしさ」について、深く考える事がありました。今までは、戦争や、原子爆弾について学校の授業や、テレビで聞いた事がある、見た事がある程度の知識しかありませんでした。実際に被爆された方の話を伺うのは、僕にとって初めての経験であり、原爆の恐ろしさや、戦争中は、もちろん、原爆投下後の苦しい生活の様子を知り、それは想像をはるかに超えていくものでした。その中で、僕が一番心に残った話をしたいと思います。

実際の体験をした方の話は、少年兵を経験した人の話でした。原爆が投下された後、毎日と死体を焼く日々が続いていました。とある日に、母親が子どもの死体を持ってきたのです。自分の子どもは一人だけで焼いて遺骨を残してほしいと頼んできました。それを上官に話してみると「だめだ」と言われてしまいました。その事を母親に伝えると、ものすごく悲しい顔をして帰ってしまった。という出来事です。子どもを失い、悲しむ母親に頼まれたのに何もしてあげる事ができなかった。上官に逆らえばその親子の為にしてあげる事もあったのに何もしてあげる事ができなかった。悲しませてしまった。今でも、この出来事を思い出して苦しんでいるそうです。少年兵の方は「この出来事を忘れたい」とも言っていました。この話を聞き、僕が戦争の時代に生まれ、同じ状況になってしまったら、少年兵さんと同じ様に、上官には逆らえないのか、こんなに苦しく、悲しい事が起こったら、僕も忘れて楽になりたいと思うのかと考えさせられる事がありました。しかし、今では考えられない事が、毎日、日常的に起こっていたのであれば忘れられないし、何も出来なかったと苦しんで、悲しむと思います。少年兵の方は「なんで自分だけ生き残ったのか」と言っていました。僕は、この事を聞いて、生き残れて良かったのではないかと思いましたが、話を聞いていくにつれて僕も同じ立場であったら、少年兵さんと同じ事を思うかもしれません。戦争中では、正しくない事が正しくなり、戦争があるから人を助けたいのに助けられない事も日常で起きてしまっています。自分の意思が通じずに、正しくない事をしないといけなくなってしまう。そう感じさせるくらい、戦争体験の話から戦争の恐ろしさを感じる事が出来ました。

戦争は、やってはいけない事だと思います。戦争をする事によって多くの人々が命を落とし、人を苦しめ、目の前で苦しんでいる人を助けられない事が当たり前に起こってしまいます。僕一人の力では出来る事が少ないかもしれません。ですが、戦争の恐ろしさや、命の尊さは、今回の広島平和学習を通じて伝えることができると思います。僕は二度とこのような悲しい出来事が起きないように戦争の事をこれからも学び、伝え、語り継いでいきたいと思います。

７８年前の悲劇

山辺中学校２年
福田　未菜

「戦争は絶対にしてはいけない。」これは私が今まで何度も耳にしてきた言葉です。私は松本市の代表として広島で過ごした３日間、このことを強く感じました。

みなさんは「やけど」という言葉を聞いてどんなことを想像しますか。今までにやけどをしたことがある人は多いと思います。熱いものに触れたときひりひりする感覚。私もこれを想像しました。しかし、原子爆弾による「やけど」は、原爆の熱で体液が一気に蒸発し、皮膚がはがれ、垂れ下がる。自分の腕や顔などの皮膚が垂れ下がっていく。この「やけど」を想像できますか。私はこの話を聞いたとき、改めて戦争の悲惨さを知りました。この話は被爆体験伝承者の橘さんからお聞きして知りました。他にも３人の被爆者の方の話をお聞きしました。その３人の中には私と同じ当時１３歳の少女もいました。その少女は、建物疎開の作業中に被爆し、被爆後しばらくして亡くなりました。被爆前日の日記には「明日も作業を頑張りたい。」と書いてあったそうです。

橘さんは話の最後に「想像することが大事だ。」「まず〝自分〟を大切にすること。そして、他の人にとっての〝自分〟も大切にしてほしい。」と話していました。

２日目、３日目に訪れた江田島旧海兵学校の資料館、平和記念資料館には血まみれになった服、特攻隊員の遺書、原爆の熱で曲がった鉄骨、大量の放射線を浴び死の斑点が出た兵士の写真などたくさんの展示があり、それらの展示は７８年前に起きたことの残酷さを物語っていました。

日本は世界で唯一の被爆国です。そしてこのたった１つの被爆国で生きる私たちは世界中のより多くの人に７８年前に起きたことを伝えていかなければなりません。

終戦からの７８年間、日本では一度も戦争が起きていません。しかし、他の国はどうでしょうか。令和になった今でも戦争や紛争が絶えない国があります。核実験を行っている国もあります。７８年前の悲劇を二度と繰り返さないよう１人でも多くの人に原爆、戦争で起きたことを伝え、これから先、戦争で誰かが傷ついたり悲しむことがなくなっていけばいいと思いました。

戦争を忘れない

開成中学校２年
多山　宇芽

「火傷（やけど）」こんな言葉では表せない程の想像を絶する苦痛。人間が生きる中で一番痛く辛いものだそうです。原爆が投下された瞬間、土煙のカーテンと大きなきのこ雲が見え、「ドーン」という爆音と熱風に襲われました。次の瞬間、皮膚が垂れ落ち、ガラスの破片が身体中に突き刺さり、血だらけで崩れた建物の下敷きになっている人々。川には黒く焦げ、水を求めて叫ぶ人々。子供を探す母親。母親を探す子供たち。中には、瓦礫（がれき）の下敷きとなり目玉が飛び出た状態で、自分に「逃げろ」と言ってくれた友人もいたと語る人もいたそうです。家は焼け落ち灰となり、必死に家族の無事を祈ることしかできない状態。思いもよらない光景です。ある少女は、看護師に看取られながら、最後に「おばちゃん、手を握って」と言って亡くなったそうです。更に、放射線も恐ろしいです。「黒い雨が降ってきた」と人々は言いました。でもそれはただの雨なんかではなく、放射線を含んだ雨でした。放射線は目に見えません。人々はその雨をたくさん飲みました。水がきたと喜んで。一瞬にして、大勢の人々の命を奪いました。また被爆者は助かったから幸運な訳ではありません。家族を救えなかった後悔、後遺症の恐怖、生きていくのも辛い程の思いだったでしょう。辛いのにも関わらず、語り継いでくださったことを忘れずに、私達も引き継いでいきたいです。お話と言葉を上回る程のものが資料館に詰まっていました。建物が崩れ、何も無い町、大きなキノコ雲、垂れた皮膚、変形した顔、包帯で巻かれた体。正直、写真が白黒の時代でよかったな…というのが本音です。写真撮影がありだったのですが、撮ることはできませんでした。イラストで表されたものは、とにかく赤を使ってたくさんの血を表現していました。決して上手とは言えませんが、とてもリアルに見えました。血の付いた衣服や焦げたお弁当、自転車でさえも溶かしてしまうような熱です。たくさんの遺書もありました。学生の中に「行ってきます」と言ってから、帰ってこなかったという人達がたくさんいました。誰も明日が来ないとは考えてもいなかったでしょう。学校に行って、働いて、食事をして、寝て。そんな普通でいつもの変わりない日常が来ると思っていたに違いありません。戦争はしてはいけないと改めてそう強く思いました。良い戦争、悪い戦争なんてありません。核兵器なんてもってのほかです。被爆者が引き継いでくださった戦争の恐ろしさと平和の尊さを私達は引き継いでいかなければなりません。少しでも多くの人にこのことを話したいです。

ヒロシマを繰り返させない

女鳥羽中学校２年
梅本　実咲

１９４５年８月６日。この日、広島で起きた悲劇を体験した方はいますか？こう尋ねて、「はい」と答えられる方に若者はいません。被爆者の方々は、高齢化と人数の減少がどんどん進んでいます。被爆者が０人になってしまうのも、遠い未来の話ではありません。いつかそうなってしまっても、まだ若くて長く生きられる私達が、戦争も核兵器も絶対に駄目だと、その恐ろしさを私たちの子や孫に伝え、戦争も核兵器も無い世界にしていかなければならないと、３日間の広島平和記念式典参加事業で強く感じました。特にそう感じた出来事を２つお伝えします。

１つ目は、被爆体験伝承者の橘さんによる被爆体験伝承講話です。

橘さんは、職場で被爆した細川さんと、江田島の少年兵で、入市被爆をした鈴木さんのお話をしてくださいました。原爆投下後の広島の光景が目に浮かぶようでした。そして、細川さんも、鈴木さんも、原爆のせいで苦しんでいた人、悲しんでいた人を救えず、今でも後悔していました。

最後に橘さんが、「言葉だけでは戦争の悲惨さや恐ろしさを伝えられないから、想像力を働かせて考えることが大切。」と仰っていたのが印象に残っています。

私たちは、細川さんや鈴木さんのような後悔をする人がいなくてもいいように、想像力を働かせ、戦争についての理解を深める必要があると思いました。

２つ目は、広島平和記念資料館の見学です。

原爆投下後の広島の写真や、ケロイドの切片、血のついた服など、展示されているものの一つ一つを見る度に、原爆や戦争の恐ろしさが自分の中に流れ込むような感覚がありました。

見学して特に印象的だったのは２つです。

まず、被爆した外国の方の写真とその方の説明を見たことです。被爆者と聞くと、私は日本人を想像してしまうのですが、当時広島に居て被爆した外国の方もいるのだと気付かされました。

次に、薬包紙に書かれた遺書を見たことです。当時は紙を手に入れることが困難だったため、薬包紙に書いたのでしょう。ちゃんとした紙でなくても、私は伝えることがある。そんな強い思いがあったのだろうと思いました。

ここで見たこと、感じたことを忘れず、戦争も核兵器も絶対に駄目だと伝えていかなければならないと思いました。

最後に、私は広島に行くまで、自分は本当に戦争や核兵器の恐ろしさ、悲惨さを理解できているのだろうかと、不安でした。そして、広島平和記念式典参加事業に参加して、広島で様々なものを見聞きして、自分の理解が本当に近づいたと思います。しかし、私は被爆したことも、戦時下にいたこともありません。実際に体験した方に比べれば、私の理解なんて足元にも及びません。それでも、戦争も原爆も絶対に駄目だと、私たちは協力して訴えなければなりません。為政者たちが間違った判断をしないように。戦争や核兵器を体験した人々が、あとは任せて大丈夫だと思えるように。そして、ヒロシマを繰り返させないために。

私たちの使命

明善中学校２年
佐藤根　桜来

私と原爆の出会いは小学校３年生のときでした。

学校の図書館の片隅にあった「戦争コーナー」にあった絵本を興味本位で手に取りました。１枚、２枚、とめくるうちに、私は最後まで読み終えることなく戻しました。

皮膚がただれた人、水を求める人。小学生の私にとってはトラウマでした。

出会ってから早５年。先生から広島に行って、戦争のことを学ぶ機会がある、と知らされた時、私はすぐに「行きたい」と言いました。５年も経っていれば、本当のことを知れるのではないかと思ったからでした。

８月５日。広島は７８年前の８月６日に、何もなかったかのように感じられるほど発展していました。

広島の平和記念式典。日本からだけでなく世界中から、平和を祈る人たちがたくさん参列していました。

広島市長の平和宣言はテレビで見るのとは違い、言葉の端端に熱が感じられました。

式典終了後、原爆ドームを見ました。

今にも崩れそうな壁は、棒で固定されてなんとかなっている、そんな印象でした。

原爆の子の像の周りには、世界中からの千羽鶴が、数え切れないほど飾ってありました。鶴をもった貞子さんは、遠くをまっすぐ見ていて、今から飛んでいきます、と言っているように感じました。

平和記念資料館に、貞子さんの折った折り鶴が展示してありました。どうやって折ったのかも分からないほど小さく、当時の物不足が目に見えていました。

資料館には、黒く、炭になってしまっているお弁当や、レンズがないメガネなどもあり、当時の悲惨さを物語っていました。

資料館では涙を流しながら、展示を見ている人もいました。

原爆が落ちると、地表は３～４，０００度にもなるそうです。高温で、人々は一瞬のうちに蒸発し、ものすごい爆風が起きたそうです。

その後、高熱による建物からの自然発火、建物倒壊によって下敷きになる。

原爆は、二次被害もひどかったようです。

でも、実際はどうなのでしょう。７８年前に起きたこの惨劇は、もう、実際に体験したことのある人がほとんどいません。

だからこそ、広島で勉強し、未来ある私たちが伝えなければならないのではないでしょうか。

今、ロシアによるウクライナ侵攻で、ウクライナが原爆による威嚇をされ続けています。被爆伝承者の橘さんは、「戦争は何も生まない。戦争はしてはいけないものだ」とおっしゃっていました。

もう二度と核兵器が使われないよう、声を上げ続けることが大切だと思います。

世界から核兵器がなくなって、世界中が手を取り合える、そんな平和な世の中を願って。

私が見た原爆の記録

信明中学校２年
西出　莉緒

私は初めて原子爆弾の被害を目の当たりにしました。２日目に見た原爆ドームは、原爆が投下された当時の姿を残していました。ドーム部分は骨組みだけになっていて、建物は側面の壁以外は瓦礫（がれき）だけになっていました。その姿からは、どれ程の威力だったのか、破壊力だったのかを考えさせられました。原爆ドームは平成８年１２月に世界遺産に登録されました。これからも多くの人々に核兵器の恐ろしさを知ってほしいです。

３日目に訪れた広島平和記念資料館では、原爆の被害にあわれた方の遺品や写真などが主に展示されていました。遺品は服、弁当箱、三輪車、時計などがありました。服はぼろぼろになっていて、服の状態を見るだけで辛くなりました。被害にあわれた方やその遺族のことを考えると、言葉に言い表せないほどの思いが伝わってきました。弁当箱は黒く焦げていました。その黒く焦げた弁当箱を見て、いつもの日常が急になくなってしまったこの子のことを考えると、私達の日々の日常がどれだけ有難いものだったのかを身にしみてわかりました。三輪車からは、小さい子の命までもが奪われた悲惨さを感じました。原子爆弾がいかに残酷なものだったのかを思い知らされました。時計は原爆が落とされた時間の８時１５分で針が止まっていました。止まった針は当時の記録を鮮明に残していて、８時１５分という原爆が投下された時間を私に教えてくれました。写真はとても痛々しく、火傷の傷はとても生々しくて黒白写真でも伝わってきて、目を覆いたくなるような写真ばかりでした。こんなひどいことを二度と起こしてはいけないと心に深く刻みました。写真にはキノコ雲の写真もあり、キノコ雲はとても迫力がありました。そのキノコ雲の下では大勢の人が亡くなったり、けがをしたりしていると考えたら、とても恐ろしく感じてきました。

私は原爆ドームと広島平和記念資料館を訪れて、原爆の恐ろしさと平和の大切さを学びました。原爆ドームを実際に見て、原爆が投下される前の写真と見比べた時に以前の姿よりも変わり果ててしまっていました。原爆の破壊力を目の当たりにして、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。広島平和記念資料館では、原爆が人々に及ぼした被害を目にしました。中でも心に残ったのは、「被害にあわれた方の写真」でした。火傷や着物の柄が皮膚に焼きついた方などたくさんの被害にあわれた方の写真がありました。

私はこれから、今回学んだことを人に話す活動をしていきたいです。私が見たことや学んだこと、感じたことを伝えて記憶を繋いでいきます。

平和な世界へ

会田中学校２年
横内　奏汰

今から７８年前の１９４５年８月６日の８時１５分に、アメリカ軍から人類初の原子爆弾「リトルボーイ」が広島に落とされ多くの方が犠牲になりました。今もなお、原爆の後遺症に悩まされている人がいます。

今回の事業に参加して、僕は初めて広島に行きました。広島という町はとても発展していて、本当にここに原子爆弾が落とされたのかと不思議な感覚に陥りました。広島では、戦艦大和ミュージアムや、被爆体験伝承者の橘さんにお話をお聞きしました。橘さんからは、細川さんという方の被爆体験をお聞きしました。広島に原爆が落とされた理由は、原爆を落とす条件が３マイル以上など、条件が完璧だったからだそうです。実際に被爆した細川さんは、当時１７歳で職場のビルで被爆したそうです。「いすも机も人もごみのように床にたたきつけられた。」というお話が一番印象に残り、心が痛みました。

２日目は、平和記念公園での、平和記念式典に参加しました。そこには平和を祈る多くの人がいました。平和の誓いを聞いて僕は、「絶対に戦争はしてはいけない。戦争をしてうれしい人はいない。」と思いました。

最終日に、平和資料館に行きました。平和資料館には、大きな火傷を負った少女の写真や黒く炭になったお弁当、８時１５分で止まった時計などがありました。すべて実際に起こったことで、すべて人間がしたことなんだなと思い、とても悲しく残酷だと思いました。

最後に僕はこの３日間を通して、原爆の恐ろしさと、戦争をしてはいけない理由を重く受け止めました。今もなお戦争をしている国があると思うと胸が痛くなります。少しでも早く戦争が終わって、平和な世界が来るといいなと思います。

言葉だけで判断してはいけない

大野川中学校２年
関沢　音愛

１９４５年８月６日午前８時１５分。皆さんは何があったか知っていますか。広島に「リトル・ボーイ」と名付けられた一つの原子爆弾が投下され、一瞬にして多くの命、そして未来が奪われました。

私は、原爆投下から７８年たった今年、広島を訪れました。想像してみてください。町が焼け野原になり、火傷のように黒焦げになり皮膚が垂れ下がる人々。「水をくれ」とさまよう人々。今の生活からは想像できません。ですが、実際に日本で起きたことなのです。私が８月６日に訪れた原爆ドームは、そこだけ時間が止まっているようでした。

私は、被爆体験伝承者の方の話を実際に聞き、心に残っている言葉が２つあります。

１つ目は「言葉で判断してはいけない」という、私が今回題名にした言葉です。「火傷のように黒焦げになった人々」と、伝承者の方のお話を聞いているとき、私は普段の火傷を想像することしかできませんでした。ですが、資料館の見学で実際の火傷の写真を見て、原爆の恐ろしさを感じました。伝承者の方も「火傷としか言い表せない。だから、言葉だけで判断してはいけない」と説明してくれました。

２つ目は、「戦争は殺しと破壊の競争」という言葉です。ここからは私の意見が多くなりますが、戦争をしていいことなどあるのでしょうか。戦争をして、喜ぶ人、幸せになる人はいるのでしょうか。自分の国が戦争をしていないからと言って、他人事だと思わず、自分事として受け止めるだけでも平和を少しでも守ることができると私は思います。戦争は悲しみ、憎しみ、そういったものしか生みません。さらに、核兵器を使えばその感情は大きくなり永遠に終わりません。私たちのように当たり前に生活していたたくさんの人々。もちろん私たちと同い年、年下の子たちもたくさんいました。一つの小さな争いが、大きくなり、何の関係もない人々を巻き込み大勢亡くなっても、まだ悲劇は終わらず、今も大勢を苦しめています。戦争が終わっても、後遺症で苦しんで亡くなった人もいます。苦しみは戦争が終わったからと言って、なくなるわけではないということを、「戦争は殺しと破壊の競争」という言葉から感じました。

広島に原子爆弾が落とされたことは変えることのできない事実です。しかし、未来を変えることはできます。事実をありのまま受け入れること、それをつなげていくこと。他にも私たちにできることは小さなことでもたくさんあるはずです。二度とこの苦しみを感じることがないように、そして、二度と核兵器を使うことがないように、広島で学んだ多くのことを、より多くの人に広めていきたいです。

広島に行かなければこの事実を知っているというだけで終わってしまっていたと思います。実際に行くことができて戦争の怖さを知るだけでなく、多くのことを感じ、考え、いろんな面で成長できたと思っています。戦争や核兵器におびえることなく、誰もが安心して暮らせる、平和な日々になることを心から願っています。

戦争のない世界へ

梓川中学校２年
安井　優那

宇宙のすみずみまで届くような爆音。人を、建物をこわしてしまうような爆風。熱線。それらが同時におこった１９４５年８月６日。被爆地広島。たった一発の原子爆弾で、広島の町は以前の町並みを失ってしまいました。

あの日から７８年後の８月５日、私たちは２泊３日の広島平和記念式典参加事業に参加しました。学校の授業でも勉強していた広島ですが、私が想像していたよりずっと都会で、高いビルもある所でした。１日目は大和ミュージアム、てつのくじら館で戦艦大和について学び、その後伝承者の方から３人の被爆の体験についてお話を聞かせてもらいました。

お話に出てきた、被爆した細川さんは当時、職場のビルの４階にいました。原爆が投下された時、細川さんは柱のかげにいて無事でしたが、イスも机も人も、床にたたきつけられ血まみれになったそうです。そして生き残った方と川に行き、ものすごいやけどをおった中学生などに水を求められたそうです。しかし、水をあげることができなかったと細川さんはずっと悔やんでいました。そして細川さんは妹が原爆に遭い助けてもらったことを知り、妹がいる所へ行きました。しかし妹は、助けてもらった方に、「手をにぎらせて」と言って亡くなっていったそうです。まだ１３才でした。そしてもう一人、被爆体験をした鈴木さんの話です。海のとっこう訓練をしていた方でした。毎日毎日死ぬための訓練だったそうです。鈴木さん達は被爆地とは少しはなれた場所にいたので、救護のため広島市内へ行きました。しかし実際は死体の焼却だったそうです。そこで死体を焼く所へ死体を入れていると、真っ黒な子どもの死体をかかえたその子どもの両親が「別に焼いてほしい」と言ったそうです。しかし鈴木さんの上司が許さなかったため別に焼くことはできませんでした。私は、その時はとても大変だったと思うけど別に焼いてほしかったと思いました。平和式典では、小学生が必死にうったえてくれた「今、平和への思いを一つにするべきです。」という力強いメッセージを聞き、心から共感しました。そして次の日に見た平和記念資料館。見ている間、小学生の言葉が心に重く残っていました。焼けた衣服、三輪車、お弁当箱、それらが「もう核は使わないで」と私たちに語りかけてくるようでした。もう見たくないと思うほど残酷な展示もありましたが、これが日本が歩んできた道です。

つらく、苦しい思いをした当時の広島を、私はすべてではないかもしれないけれど、学ぶことができました。そして、戦争をして幸せになる人などいないということも分かりました。今、日本は戦争のない生活を送れていますが、世界では戦争で苦しい生活を強いられている人がたくさんいます。私達は、戦争のない世にするため、「平和」について考え続け、実現しなければなりません。これらのことを語りついでいくことが私の義務だと思います。７８年前の８月６日をもう二度とおこさないために。

考えて　考えて

波田中学校２年
奥原　崇暁

８月５日、ぼくは初めて広島の地を訪れました。広島は、長野県と比べるととても暑く７８年前、原爆が落とされた事を忘れさせるように活気だっていました。

ぼくが広島に訪れる前、ぼくは被爆された中沢啓治さんの漫画『はだしのゲン』を読んで被爆の実体を知ろうと思いました。『はだしのゲン』の描写や出来事は悲惨なものばかりでしたが、フィクションの漫画に見慣れているせいか、現実とは思えない程悲惨なのに、なぜか心の奥まで響きませんでした。それでも学習を進める内にこれは本当の出来事で、夢でも漫画でもない現実のものだという確信がついてきました。

特に印象深いのは、橘さんの被爆体験伝承講話の言葉で、「言葉には表せる限度があり、知識として知っただけで分かったつもりになっている。」と橘さんは仰っていました。そこからぼくは色んなことを考えたり、想像したりしました。もし今、日本が戦争をやっていたら、明日もしかしたらすぐ原爆で一瞬で消えるのだろうかと考えて、おなかを空かせて寝るのだろうか。そんなことを考えると、心の奥からしゃくり上げるように悲しくなります。

少し視点を変えてみると色んなことが色んな視点で見えてきました。例えば、核兵器は非人道的とよくいうけれど、そもそも兵器に人道的なものはあるのだろうか？親の愛を受けて育った人が、どうしてこんな非人道的なものを落とそうと思えたのか？今、ウクライナで戦争をしていて、多くの国がウクライナを正しいと言っているけれど、ロシアもウクライナも、すでに殺しているのだからどちらも悪いのではないだろうか？様々な疑問が頭に浮かんできます。また原爆の放射で原爆症、多くの場合白血病になったそうで、高熱や嘔吐（おうと）、血便、歯茎からの出血などの症状で当時では不治の病として知られていました。とにかくつらくて、苦しくて、もし自分がなったら自殺したくなるのではないかと思います。そう考えると、もしも自分が被爆をしたのなら、ひどい火傷や、原爆症で長い間苦しむよりも、熱線で痛みを感じる間もなく即死したほうが楽だったのではないかと思います。即死が良い死に方。誰がどう考えようと馬鹿げていることで、だからこそ原爆、延（ひ）いては戦争をしてはいけない理由だと思います。

今平和な日本ですら、苦しんでいる人がいます。ぼくは以前、うつ病なんて戦争や原爆の苦しさと比べたら大したことないと思っていました。確かにそれは一理あると思います。でもぼくを含め大勢の人は原爆の苦しさを知らないように、うつ病のような、なったことのない苦しさを知りません。なのでぼくは「この人はこうだ」みたいな決めつけや人を傷つけることを気を付けています。それでも、相手を傷つけていないつもりでいても誹謗中傷（ひぼうちゅうしょう）などで人を死に際まで追い込んでしまっている人が大勢います。だから、自分は自分であり、所詮は一度の人生しか生きていないのだから、他人の気持ちを完全に理解することはできないので、他人には優しくするべきであると思います。

広島の平和学習に参加して

鉢盛中学校２年
松田　七海

１９４５年8月6日8時１５分、世界初の原子爆弾はヒロシマへ投下され、人々を恐怖に陥れ笑顔を奪いました。その年、終戦を迎えたことで原子爆弾投下は過去の記憶へと変わりました。

７８年経った今、広島は活気溢(あふ)れ栄え明るくあたたかい街となっています。そこに残る原爆の影は、当時の形で残された原爆ドームと毎年行われる平和記念式典のみです。ビルが立ち並んだ街の眩(まぶ)しい日差しと木漏れ日に空を仰ぎ、耳を澄まさずとも鳴り響く蝉(せみ)の声を聴き、私はやはり、この美しい街に起きた残酷な運命を頭で思い描けずにいました。

明るい地にはなんとも似合わず壁が崩れ鉄骨が見えた原爆ドームは、当時から時が止まったままのようで、原爆の悲惨さを心の底から感じることとなりました。

平和記念式典では参加した世界各地の方が、共に黙祷(もくとう)を捧げました。沢山の方が関わり平和を願う様子こそ被爆国となった国がとるべき姿勢なのだと思い、心に残りました。

けれど中でも一番印象に残ったのはやはり平和記念資料館でした。資料館は原爆の威力や被害の様子を示した写真、遺品、遺言、後遺症の写真などが飾られていました。これまで被害の話は沢山聞いていましたが、写真や実物を目で見るのは初めてで、それが本当に存在したものだという実感はすぐには沸きませんでした。被爆により怪我を負った方達の写真は、特に現実感がなく映画やアニメのような作り物の世界に感じてしまうほど、まっすぐ受け取れませんでした。当時その日その場所に生きて被爆したわけでもない私もショックを受けたのですから、沢山の死者の中生き残り、大切な人を亡くし、実際の様子を目で捉え音を聴き体感した方々は言葉にできないほど苦しかったのだろうと、共感もできない残酷さにまたショックを受けました。原爆症と呼ばれた放射線による後遺症も大きな苦しみと影響を与えたそうで、平和記念公園にある「原爆の子の像」のモデルとなった１２歳の少女も後遺症である白血病で亡くなったそうです。資料館で改めて原爆の恐ろしさと残酷さを感じることができました。

平和が儚(はかな)く遠く手が届かない存在になるのではなく、当たり前に私たちが平和と共にいられることはなんてすごいことなのだろうと感じました。それが全世界の当たり前になることを願うばかりです。

今世界には核が１万発以上存在しています。中にはヒロシマとナガサキに落とされた原子爆弾の１，５００倍以上の威力があるものも存在しています。悲劇の再来を願っているというのでしょうか。核保有が核爆弾に対する抑止力として働いていても、核を使うという選択をする人間はいつかどこかで現れてしまうかもしれません。戦争がどれだけ不利益をもたらすのか、２回も起きた世界の戦争で人類は学んだはずです。もう二度と惨禍(さんか)が起こらないよう、そのために核兵器廃絶と戦争を無くすことを私たちは目指すべきです。たとえ１９４５年当時の日本が核兵器を所有していたことで被害がなかったとしても、そんな恐ろしいものを手に地球で暮らすことを私は望みません。全人類が全く同じことを望む、というのは不可能だとしても、平和が私たちにとって一番の願いであって欲しいです。

和とＰＥＡＣＥ

信大附属松本中学校２年
森木　和奈

７８年前の今日８月６日、その日も今日の様に快晴だった。お母さんに作ってもらったお弁当、中身は米と麦の混合ご飯とじゃがいもの油炒め。今では考えられない質素なお弁当。でも、そのお弁当を楽しみに行く場所は、建物疎開の作業現場。建物疎開とは空爆による火災が広がるのを防ぐため、あらかじめ建物を取り壊して空き地を作ることを言います。これは全国の都市で行われ、広島市では１９４４年１１月から国の指示を受けて開始。燃えると困るという理由で市役所や県庁、軍需工場などの周りを壊したのです。今では考えられないことだけど、戦時中は、すべての国民が戦争に協力する様、法律で決められていたのです。

１９４５年8月６日も、今の中学生以上にあたる動員学徒や、地域や職場ごとに編成された大人たちが作業中に、原爆で大勢が犠牲になりました。

広島平和記念資料館で、私と同年代の子たちが建物疎開の作業中、被爆して亡くなり、その子たちが持っていたお弁当、着ていた洋服、持っていたかばん、それらを見た瞬間、自分の事のように思えて、その時の映像が頭の中一杯になり、自分の家族や友達だったらと思うと全身に鳥肌が立ち、震えが止まりませんでした。

戦争はどれだけ沢山の命を奪い、人の幸せも奪い、苦しみや悲しみを残すのだろう。

真っ赤、いや違う、
　黒味がかった朱色、
　　そんな気もする。
　とにかく過去一度も見たことのない、
　　あざやかで、強烈な色だった。

資料館の壁に掲げられていた、被災カメラマンの写真集の言葉。強烈な色ってどんな色だろう。出血のことか、それとも火傷した皮膚の色か、また違うものなのか。想像したくない景色が私の頭から離れませんでした。

私の名前にもある「和」は、「人々が、まるくおさまり、ゆったりとした状態」という意味です。個人同士の集まりについても、組織（村や国など）同志の集まりについても言えます。

「和」は、人々が調和し強調している、戦争など争いがない平和な状態を意味していると思います。

英語で「平和」は、「PEACE」です。辞書で調べると、「平和・和平・講和」とすべての意味をカバーしている単語だということがわかります。PEACE という英単語ひとつ覚えれば、国内だけではなく世界で、平和を表現できるのです。

世界で初めて核爆弾を受けた日本。だからこそいま世界各地で起きている争いに協力するのではなく、話し合いをすることで争いが無くなるよう、大人たちから行動し、みらいの私達に平和のバトンを繋げて欲しいと思うし、私自身も周りの人たちに広島で学んだことを伝えていきたいと思います。

ひろしまレポート

才教学園中学校２年
松井 那奈

耳を裂く爆音、肌を溶かす熱、オレンジや赤の目を刺すような閃光が走り、ほんの数秒前にあったはずの日常はたった一発の爆弾が奪い去ってしまった。

「ヒロシマ」そこは７８年前、世界で初めて人の上に原子爆弾が落とされた地。たくさんの人々が熱さと痛みに喘ぎ苦しみ、水を求め、誰にも看取(みと)られず、孤独と水火の中で亡くなっていく、あの一瞬がヒロシマの街を悲しみで覆ってしまいました。

平和とは何なのか。あの日の真実とは。私は自分でそれらを感じるために今回、平和学習に参加させていただきました。

広島市に着き、駅を出て目の前に広がったのは多くの建物と人々で賑(にぎ)わう、活気に溢(あふ)れた街でした。それこそ、原爆によって全てが吹き飛び、壊滅状態になった場所ということを感じさせないほどでした。

私の中で平和記念資料館は深く記憶に刻まれました。一つ、また一つと並べられた遺品は不思議なほどに淡々としていて静かで、私は息を止めて、その一つ一つを見ていきました。そのうち、小さな折り鶴が目に留まりました。これは２歳の時に被爆し、その後わずか１２歳で人生の幕を下ろした佐々木禎子さんが、お見舞いに千羽鶴が贈られたことをきっかけに折られたものです。「生」を願った少女の姿がそこにはありました。禎子さんにもきっと未来というものはあったはずです。友達や家族と毎日を過ごし、大人になって生きていく、自分の人生があったはずです。そんな生きる幸せと未来を原爆が断ち切ってしまったのです。人々の人生を奪い去っただけでなく、残された人たちにも心と身体に深い傷をつけ、生きることへの苦しみを与えたあの悲劇は繰り返してはならない、と心に語られました。

原爆によって亡くなった、１４万人という数字は沢山の一人で作られています。その沢山の一人にもそれぞれの生きる道がありました。訪れた広島には、あの日確かに「生きていた」瞬間がありました。その中には迫ってくるような、目を逸らしたくなるものも沢山ありました。しかし、私たち人間には人の痛みを知ることの出来る心があります。それは世界共通だと思います。原爆を実際に体験した人たちからすると、受けた辛さは一欠片しか理解できていないのかもしれません。それでも、今生きている私たちは、この二度と繰り返してはならない過ちを後世へと伝えていくこと、平和な世界を築いていくことができます。世界が誰しもにとって平和になるためには、お互いを認めて尊重すること、友達を大切にすること、そして家族を愛することが必要だと思います。身近な幸せが世界の平和へと繋がっていくと私は考えます。もう起こってしまった過去を変えることは出来ません。なので、未来を繋いでいきます。今も広島の街中で燃え続けている平和の灯が消える日を願って今日を生きていきます。

平和の灯が消えるとき

松本秀峰中等教育学校２年
古田　真琴

私は今年の夏、初めて広島へ行きました。広島の街中を見る中で、本当にここに原爆が落ちたのかと疑うほどそこは活気のある街でした。

１９４５年8月6日8月１５分、爆音とともに土煙のカーテンが広がりました。今までの生活がうそのようなそんな出来事でした。町は一瞬にして破壊され、多くの人が何が起きているのか分からないまま命を奪われました。北東９，６４０m上空で投下された原爆は上空約６００mの所で爆発。投下から４３秒後、広島は地獄絵図と化しました。

私は呉大和ミュージアムに行った後、被爆体験伝承者の橘さんに被爆体験者の細川さんとその妹さん、そして鈴木さんのお話を聞きました。細川さんは当時１７歳で職場の４階で被爆。座っていた場所が柱に近いことが幸いしケガをすることはなかったそうです。しかし、同じ職場だった他の人はがれきに埋もれ身動きがとれなかったそうです。なんとかそこから脱出した細川さんが見たのは火があちこちで飛び回り、がれきで埋もれた人が助けてーと言っているまさに地獄絵図だったそうです。細川さんはその後、家を壊し、火を広げないようにする建物疎開をしたそうです。一段落した後、実家の宮島へと一時帰省。そして自分の妹が亡くなったことを知ります。細川さんの妹さんは日記を残しており、その日記が手元にあったことから妹だと分かったそうです。そして細川さんは原爆が落ちてから５０年後、「夏服の少女たち」という本を書いたそうです。この本は細川さんの妹さんの日記を元に書いたそうです。細川さんは被爆体験を橘さんに伝える時、ただただ忘れたかったと言ったそうです。

鈴木さんは当時１６歳で敵に突っ込むための特攻訓練をしていたそうです。訓練はある島でやっていたため原爆の被害は受けませんでしたがものすごい音が聞こえてきたため広島の方を向くと、煙が見えたそうです。その数時間後、１６～１９歳の人が集められ、救助に赴いたそうです。現場では遺体焼却をしており、供養塔には約７万人もの骨があったそうです。

私は橘さんの話を聞き、いろいろなものを見て回る中で今普通に生活できているのがどれだけありがたいことなのかを知りました。そして実際に戦争があったということを目の当たりにし、戦争がどれほど危険なものかを改めて痛感しました。今、実際に被爆している人が少ない中で、橘さんから話してもらったことをたくさんの人に知ってもらうことで、自分も戦争をなくすための手伝いができると思っています。今もウクライナとロシアは戦争を続けています。また、核を所有する国もあります。もう広島のようなことが起こらないようにしっかりと私の下の世代へとつないでいき、核兵器をなくし、広島にある平和の灯が消えることを願って。

真実と向き合う

松本国際中学校２年
清水　蓮

７８年前、８月６日午前８時１５分広島は青空に包まれ真夏の太陽が照りつけていた。突如稲妻のような光と爆音とともに、広島の町が噴き飛びました。

僕が広島平和記念式典参加事業に参加させてもらった理由の一つは、当時のまま残された原爆ドームを自分の目で見ることに意味があると思ったからです。もう一つは、日本人として今、平和に暮らしている僕たち中学生が広島平和記念式典に参加することや平和記念資料館で当時の事に向き合い正しく学ぶことが大切だと思ったからです。

７８年後の同じ日に僕たちは広島に行き、たくさんの事を学んできました。原爆ドームを実際に見た時、ボロボロなのに支え合っている骨組みや焼けくずれたレンガの壁から当時の深刻さ、原子爆弾の威力を肌に感じると共に立派に立っている様子に感心しました。また、この原爆ドームを残すか残さないかの問題がありますが残すのも、戦争の恐ろしさ、原爆の恐ろしさを忘れないという意味で良いと思いますし残さないのも、当時の恐ろしかったことを思い出したくないという意味で気持ちが伝わりました。

次の日、僕達は広島平和記念資料館に行き、またいろいろなことを感じてたくさんのことを学びました。原爆の被爆を受け放射線を浴びて全身の皮膚がただれていた被爆者の実際の写真がありました。その写真は誰が見ても足が震えるくらい被爆者の苦痛や原子爆弾の恐ろしさがまじまじと伝わると思いました。焼けて真っ黒な三輪車や服もありました。それを当時は乗っていたり着ていたりしていたと思うと本当に胸が苦しくなり原爆への怒りが高まります。最後に僕たちは平和の灯に向かって祈りを送りました。「これから先、戦争の無い平和な暮らしが永遠に続きますように」と。

今回の体験を通して僕は強く思いました。それは、日本人ならば広島原爆投下、当時の様子、原子爆弾の恐ろしさの〝真実〟を知る必要があると思います。ネットなど特に学校の教科書だけでは向き合えない真実がそこにはあると思います。広島で起きた真実を肌で感じ二度とこのような戦争が起こらないように伝え続けていきたいと思いました。

広島を再び訪れて

松本ユース平和ネットワーク　信州大学 工学部 1年
大津　柚稀乃

ユースとして広島の平和祈念式典や平和活動に参加した経験は、私にとって印象的なものだった。私は中学生時代に学校で平和について学ぶ機会がほとんどなかったため、自治体がこうした活動を行っていることに新鮮な驚きを感じた。

広島を訪れたのは２回目で、初めて原爆ドームを見たのは小学生の頃だった。当時、こんなに大きな建物が原爆でここまでぼろぼろになるのかという衝撃を受けた。しかし、今になってみると、その衝撃はなくなり、先人たちが築いた平和な現在がいかにいとおしく大切なものなのかということに改めて気づかされた。資料館も改装される前で、今よりもっと暗くたくさんの資料が展示されていたように思える。当時被爆者の方の話を聞くことができるところがあり真っ暗な個室で小さな液晶を見つめていた。今回も時間の許す限り被爆者の方の映像を見た。前回より悲惨な話は少なかったように思うがそれでも胸に来るものがあった。広島の街を歩いていると、何十年も前に多くの人々が苦しみながら亡くなったこと、地獄が広がっていたことを想像し、胸が重くなる瞬間がありました。中学生という多感な時期にこのような話をきくことは心に深く刻まれ平和を考える機会になったのではないかと思う。

旧大日本帝国海軍の資料館で、特攻する人たちの遺書があった。遺書には「死ぬのが怖い、生きたい」といった言葉は一言も書かれていなかった。それにもかかわらず、無理やり書かされている感じもせず心の中で腹をくくっていたのではないかと考えた。特攻隊員たちは私よりも年下の人たちばかりで、自分の意思と関係なく命を散らす決断を下すことは、どれだけ歳を重ねても容易なことではないはずだ。国のためになるのかどうかもわからない中、命を捧げることが求められた彼らの選択に思いを馳(は)せ、老若男女どんな理由であろうと国のために命を差し出すようなことがあってはならないと改めて感じた。

広島を訪れた今回、どこか他人事のように感じる瞬間がありました。その瞬間、私は平和な時代を生きることができている幸せを改めて実感し、喜びを感じました。この貴重な体験を心にとどめて、未来に向けて希望と平和を大切にしていこう、未来の子供たちも平和な世界を生きられるように今努力していこうと思う。

広島で戦争について学んで

松本ユース平和ネットワーク　信州大学　経法学部　3年
市毛　鞠花

７８年前の８月６日広島に原子爆弾が投下された。これだけのことならほとんどの日本人が知っていると思う。私自身、広島・長崎に原子爆弾が投下され、原子爆弾の影響でたくさんの人が亡くなり、苦しんだ人がいたということは知っていた。日本が戦争を行った結果、軍人だけでなくたくさんの若者や、戦争に関係のない子供たちの命までも奪われていったということは簡単に想像できると思う。しかし、今回の研修で私が見聞きした「戦争」は、私の想像とは違いさらに悲惨で残酷なものだった。

被爆伝承者の方のお話を聞き、原爆資料館での展示を見てまず感じたことは、生き残った人の後悔だった。私は戦争が終わり生き残った人に対して「幸運な人だ」だとか、「生き残れてよかった」という風に思っていた。しかし被爆者のお話を伝える活動をしている方の話を聞くと、生き残った人は、自分が生き残ったことに強い後悔を抱いていた。せっかく生きているのにその事実にすら後悔をしてしまうほどの惨劇だったのだということは、お話を聞いただけでは想像をすることもできなかった。原爆資料館で当時負傷した人の写真や、当時の状況を描いた絵などの資料を見学すると、想像を絶するような展示があり見るだけでも覚悟がいるものだった。それくらい今の私たちが生きている社会は平和で戦争とは程遠い場所なのだと思う。皮膚がただれるほどのやけどを負っている人、原爆の影響で暑さに耐えられず川に飛び込む人、防火水槽に逃げ込みその中で亡くなった人がいたというお話を聞いても、現実に起こったことだと思うのは難しいだろう。しかしそれは本当に当時広島で起こっていた現実で、今も世界中に核兵器がある限りまた生じるかもしれない現実なのだ。生き残ったことを後悔させるような当時の状況、生きていたとしても後遺症の被害で７０年以上たった今もなお苦しんでいる人がいること、こんなあまりにも非人道的な武器を世界は未だに保持していて、使用される可能性があるのだと思うととても怖くなる。

戦争はその国に住むすべての人を巻き込む。旧海軍兵学校で私と同い年くらいの１０代後半から２０代くらいの特攻隊に行った人の遺書を読んだ。私も死ぬ時がやってきました。自分たちが必ず死ぬ作戦に参加することになったのに、両親や兄弟に対して感謝や励ましの言葉をつづった手紙を読むと胸がいっぱいになった。私はまだやりたいこともたくさんあるし、今国のために死ぬのだと自分に思い込ますことはできないと思う。まだ２０代でこれから何十年も生きていけるはずだったのに、両親に「私も死ぬ時がやってきました」という遺書を７８年前の人たちはどのような気持ちで書いていたのだろうと思うと、とてもやるせない気持ちになる。

戦争はダメ、核兵器は廃絶しなくてはいけない。多分実現は困難で、非現実的で夢物語のようなものだと思う。今も世界では戦争をしている国があって、いつ核兵器を使った戦争が始まってもおかしくない状況にある。戦争をしない、核兵器を廃絶する、夢物語だとしても実現が不可能だとしても、あの日広島で何が起こったのかを知った以上訴えていかなければならないと感じた。私たち若い世代が、世界中の人がそのような認識を持つことができれば、広島のような悲劇を繰り返すことは無いのだと思う。

静寂の都での願い

松本ユース平和ネットワーク　ディーキン大学(豪)　2年
武田　朋己

太陽が容赦なく照りつける真夏の日、広島の町は沈黙に包まれた。被爆から７８年目の「原爆の日」である。今年、私は松本ユース平和ネットワークの一員として広島平和記念式典参加事業に随行し、貴重な経験をさせていただいた。広島で得た３日間の経験を報告したい。

広島に到着後、私たちは呉市の大和ミュージアムに向かった。道中、今年５月にＧ７サミット（主要国首脳会議）が開催された宇品島を眺めた。大和ミュージアムでは「戦艦大和」の歴史や呉で製造された海洋兵器も展示されていた。また、それらが建造された時代の背景、使用された技術、そして実際の戦艦大和の運命が乗組員の手記などをもとに記されていた。当時の造船技術は失われることなく継承され、今も大型タンカーなどの造船技術に活かされている。私たちが利用している多くの技術は、軍民転換されてきたものである。戦争を再び繰り返してはならない。しかし、戦争がもたらした技術革新にも目を向けるべきだと感じた。

次に、広島市内に戻り、被爆伝承者の講話を拝聴した。全国の被爆者の平均年齢は、今年３月時点で８５．０１歳となっている。被爆地では原爆の実体験のない世代が増えてきている。この背景のもと、広島と長崎の両市は、自らの体験を語る「証言者」と、それを継承する「伝承者」の養成を強化している。私たち松本ユース平和ネットワークとして、実相を正確に伝えるためにどう行動し、伝承すべきかを考える良いきっかけになった。

２日目は、広島平和記念式典に参加した。式典には１１１の国の代表を含む約５万人が集まり、平和への祈りを捧げた。静寂の中、私の心には、４年前にワシントン郊外のスミソニアン博物館で見たＢ－２９爆撃機「エノラ・ゲイ」の姿が浮かんできた。７８年前、その銀色の機体から投下された爆弾により、今いるこの場所は壊滅した。そして、無辜(むこ)の民が犠牲となった。その惨状を二度と繰り返してはならないという想いのもと、私は静かに黙祷(もくとう)を捧げた。

その後、江田島に移動し、旧海軍兵学校を見学した。かつては、この場所で将校の卵たちがここで厳しい訓練を受け、日本海軍の要として巣立って行った。清潔で整然とした敷地、御影石の大講堂、赤レンガの旧生徒館などが、昔日の面影を偲(しの)ばせている。構内の教育参考館には、日露戦争で華々しい武勲をたてた東郷平八郎元帥の遺髪をはじめ、旧海軍関係の資料など約１，０００点が保存されている。栄光と悲劇に彩られた日本海軍の歴史を知るだけでなく、日本人としての誇りを改めて考えさせられる展示であった。

最終日は、広島平和記念公園と平和記念資料館を訪れた。平和記念資料館には被爆者の遺

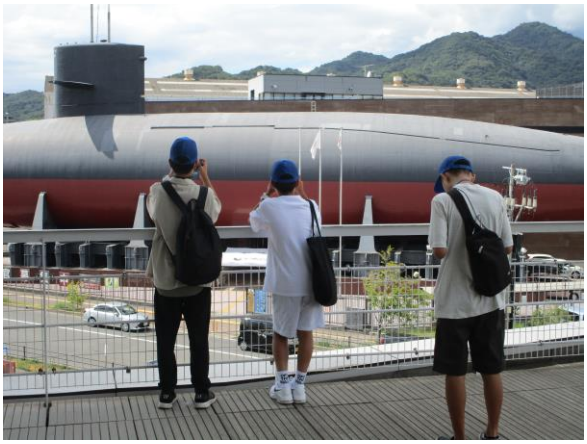
品、被爆地の模型、報道関連の資料などが展示されており、戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさに言葉を失った。資料館の本館には、被爆体験者が描いた絵が展示されていた。原爆の惨状を伝える作品は、写真以上にその実相を正確に捉えているのかもしれない。

広島での３日間は、戦争や核兵器の恐ろしさを体感するとともに、平和を実現するための行動を考える貴重な時間となった。松本ユース平和ネットワークでも、この経験を元に、平和への思いを伝え続ける活動を展開していきたい。私たちが経験したことを伝えることで、戦争を繰り返さないための一石となれれば幸いである。最後に、広島訪問の機会を与えてくださった皆様に、心から感謝いたします。

写真記録

８月５日（土）

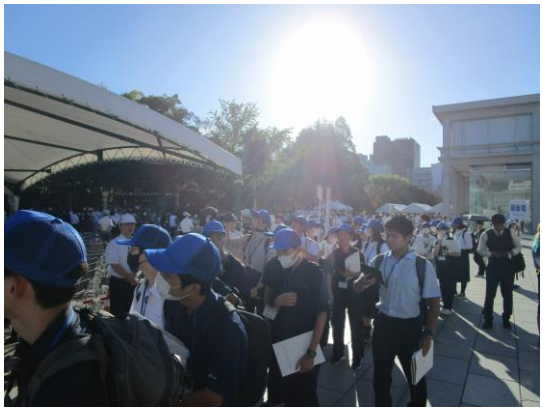
呉市大和ミュージアム・海上自衛隊呉史料館（てつのくじら館）



被爆体験伝承者講話

８月６日（日）

広島平和記念式典

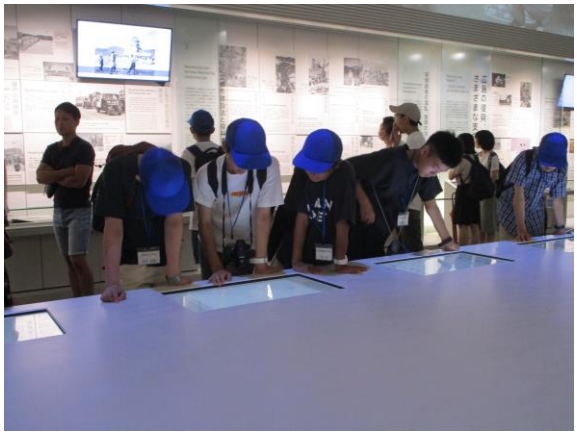


平和記念公園見学（原爆ドーム・原爆死没者慰霊碑・折鶴献呈）

江田島旧海軍兵学校

8月7日（月）

平和記念資料館見学



平和への誓い

みなさんにとって「平和」とは何ですか。
争いや戦争がないこと。
差別をせず、違いを認め合うこと。
悪口を言ったり、けんかをしたりせず、みんなが笑顔になれること。
身近なところにも、たくさんの平和があります。

昭和２０年（１９４５年）８月６日　午前８時１５分。
耳をさくような爆音、肌が焼けるほどの熱。
皮膚が垂れ下がり、血だらけとなって川面に浮かぶ死体。
子どもの名前を呼び、「目を開けて。目を開けて。」と、叫び続ける母親。
たった一発の爆弾により、一瞬にして広島のまちは破壊され、悲しみで埋め尽くされました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」
仲間を失った私の曽祖父は、そう言って自分を責めました。
原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、
生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

あれから７８年が経ちました。
今の広島は緑豊かで笑顔あふれるまちとなりました。
「生き残ってくれてありがとう。」
命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。

私たちにもできることがあります。
自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。
友だちのよいところを見つけること。
みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。

今、平和への思いを一つにするときです。
被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。
身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。
誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。

令和５年８月６日

こども代表　広島市立牛田小学校　６年　勝岡　英玲奈
広島市立五日市東小学校　６年　米廣　朋留

平　和　宣　言

７８年前の原爆投下の日を、まるで生き地獄のようだったと振り返る当時８歳の被爆者は、「核兵器を保持する国の指導者たちは、広島、長崎の地を訪ね、自らの目で、耳で、被爆の実相を知る努力をしていただきたい。あの日、熱線で灼(や)かれ、瞬時に失われた命、誰からも看取られず、やけどや放射能症で苦しみながら失われていった命。こうして失われた数え切れない多数の人々の命の重さを、この地で感じてもらいたい。」と訴えています。

本年５月のＧ７広島サミットで各国首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話を経て記帳された芳名録は、こうした被爆者の願いが各国首脳の心に届いていることの証しになると思います。また、慰霊碑を参拝された各国首脳に私から直接お伝えした碑文に込められた思い、すなわち、過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて、全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和を祈念する「ヒロシマの心」は、皆さんの心に深く刻まれているものと思います。こうした中、Ｇ７で初めて「核軍縮に関するＧ７首脳広島ビジョン」が独立の文書としてまとめられ、全ての者にとっての安全が損なわれない形での核兵器のない世界の実現が究極の目標であることが再確認されました。それとともに、各国は、核兵器が存在する限りにおいて、それを防衛目的に役立てるべきであるとの前提で安全保障政策をとっているとの考えが示されました。

しかし、核による威嚇を行う為政者がいるという現実を踏まえるならば、世界中の指導者は、核抑止論は破綻しているということを直視し、私たちを厳しい現実から理想へと導くための具体的な取組を早急に始める必要があるのではないでしょうか。市民社会においては、一人一人が、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」というメッセージに込められた人類愛や寛容の精神を共有するとともに、個人の尊厳や安全が損なわれない平和な世界の実現に向け、為政者に核抑止論から脱却を促すことがますます重要になっています。

かつて祖国インドの独立を達成するための活動において非暴力を貫いたガンジーは、「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最強の武器よりも強い力を持つ」との言葉を残しています。また、国連総会では、平和に焦点を当てた国連文書として「平和の文化に関する行動計画」が採択されています。今、起こっている戦争を一刻も早く終結させるためには、世界中の為政者が、こうした言葉や行動計画を踏まえて行動するとともに、私たちもそれに呼応して立ち上がる必要があります。

そのため、例えば、私たちが日常生活の中で言葉や国籍、信条や性別を超えて感動を分かち合える音楽や美術、スポーツなどに接し、あるいは参加して「夢や希望がある」といった気持ちになれるような社会環境を整えることが重要となります。皆さん、そうした社会環境を整えるために、

世界中に「平和文化」を根付かせる取組を広めていきましょう。そうすれば、市民の支持を必要とする為政者は、必ずや市民と共に平和な世界に向けて行動するようになると確信しています。

広島市は、世界１６６か国・地域の８，２００を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民レベルでの交流を通して「平和文化」を世界中に広めます。そして、平和を願う私たちの総意が為政者の心に届き、武力によらず平和を維持する国際社会が実現する環境を作ることを目指しています。また、被爆者の平和への思いを世界中の若者に知ってもらい、国境を越えて広め、次世代に引き継げるようにするために、被爆の実相に関する本市の取組をさらに拡充していきます。

各国の為政者には、Ｇ７広島サミットに訪れた各国首脳に続き、広島を訪れ、平和への思いを発信していただきたい。その上で、市民社会が求める理想の実現に向け、核による威嚇を直ちに停止し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けて一歩を踏み出すことを強く求めます。

日本政府には、被爆者を始めとする平和を願う国民の思いをしっかりと受け止め、核保有国と非核保有国との間で現に生じている分断を解消する橋渡し役を果たしていただきたい。そして、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となり、核兵器廃絶に向けた議論の共通基盤の形成に尽力するために、まずは本年１１月に開催される第２回締約国会議にオブザーバー参加していただきたい。また、平均年齢が８５歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆７８周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和５年８月６日

広島市長　松井　一實

旅の日程

	時　間	項　目	備　考
8月5日（土）	7:50	松本駅自由通路へ集合	受付
	8:00～8:10	出発式	
	8:38～10:53	松本駅　⇒　名古屋駅	しなの4号
	11:10～13:27	名古屋駅　⇒　広島駅	のぞみ21号 （車内で昼食）
	13:45～14:20	広島駅　⇒　呉市大和ミュージアム	貸切バス
	14:20～15:30	呉市大和ミュージアム見学	
	15:30～16:15	呉市大和ミュージアム　⇒ ＲＣＣ文化センター	貸切バス
	16:15～17:15	被爆体験伝承講話	
	17:15～17:30	ＲＣＣ文化センター　⇒　ホテル	貸切バス
	17:30	オリエンタルホテル広島　着	
	18:00～	夕食（ホテル）	
6日（日）	6:00～	朝食（ホテル）	
	7:10～7:30	ホテル　⇒　広島平和記念公園	徒歩
	7:30～8:45	広島平和記念式典	
	8:45～10:30	広島平和記念公園内見学	
	10:30～11:00	広島平和記念公園　⇒　お好み村	貸切バス
	11:00～12:00	昼食（お好み村）	
	12:00～13:30	お好み村　⇒　江田島旧海軍兵学校	貸切バス
	13:30～15:00	江田島旧海軍兵学校見学	
	15:00～16:30	江田島旧海軍兵学校　⇒　ホテル	貸切バス
	16:30	オリエンタルホテル広島　着	
	17:00～	夕食（ホテル）	
7日（月）	7:00～	朝食（ホテル）	
	8:00～8:20	ホテル　⇒　広島平和記念公園	徒歩
	8:20～11:00	広島平和記念資料館等見学	折鶴献呈
	11:00～11:20	広島平和記念公園　⇒　広島駅	貸切バス
	11:20～12:00	広島駅（お土産）	
	12:18～14:34	広島駅　⇒　名古屋駅	のぞみ24号 （車内で昼食）
	15:00～17:04	名古屋駅　⇒　松本駅	しなの17号
	17:10	解散式（松本駅自由通路）	

参加者一覧

参加生徒

学　校　名	氏　名	学　校　名	氏　名
清水中学校	新堀（しんぼり）　大和（やまと）	明善中学校	佐藤根（さとね）　桜来（さき）
鎌田中学校	岡（おか）　陽向子（ひなこ）	信明中学校	西出（にしで）　莉緒（りお）
丸ノ内中学校	村松（むらまつ）　陽佳（はるか）	会田中学校	横内（よこうち）　奏汰（かなた）
旭町中学校	原本（はらもと）　航輔（こうすけ）	大野川中学校	関沢（せきざわ）　音愛（おとな）
松島中学校	大澤（おおさわ）　日向（ひなた）	梓川中学校	安井（やすい）　優那（ゆうな）
高綱中学校	菊池（きくち）　柚音（ゆづね）	波田中学校	奥原（おくはら）　崇暁（たかあき）
菅野中学校	望月（もちづき）　蓮（れん）	鉢盛中学校	松田（まつだ）　七海（ななみ）
筑摩野中学校	柳澤（やなぎさわ）　新汰（あらた）	信大付属松本中学校	森木（もりき）　和奈（かずな）
山辺中学校	福田（ふくだ）　未菜（みな）	才教学園中学校	松井（まつい）　那奈（なな）
開成中学校	多山（たやま）　宇芽（うめ）	松本秀峰中等教育学校	古田（ふるた）　真琴（まこと）
女鳥羽中学校	梅本（うめもと）　実咲（みさき）	松本国際中学校	清水（しみず）　蓮（れん）

松本ユース平和ネットワーク

所　属	氏　名
信州大学　工学部　１年	大津（おおつ）　柚稀乃（ゆきの）
信州大学　経法学部　３年	市毛（いちげ）　鞠花（まりか）
ディーキン大学（豪）２年	武田（たけだ）　朋己（ともき）

事務局

所　属	役　職　等	氏　名
丸ノ内中学校	教　諭	山田（やまだ）　翔吾（しょうご）
波田中学校	教　諭	横山（よこやま）　文香（あやか）
平和推進課	主　事	小沢（おざわ）　智也（ともや）

平和都市宣言

世界の恒久平和は人類共通の願いである。

われわれは、平和を愛するすべての人々とともに、核兵器の廃絶と戦争のない明るい住みよいあすの郷土を願い、ここに「平和都市」の宣言をする。

昭和６１年９月２５日

宣言の趣旨は、平和の確保・核兵器の廃絶を願いとしています。

私たち松本市の「平和都市宣言」が力強い宣言となるよう、暮らしに根ざして、平和の願いを大きく、根強く、たくましく育て続けていくことが大切です。

ひろしま レポート

第33回広島平和記念式典参加事業

2023.11

編集発行:松本市 総務部 平和推進課

松本市役所前庭に設置されている「平和の灯（ともしび）」

松本市では、松本市平和都市宣言の理念に基づき、一人ひとりが命を大切にし、永久に平和であることを願い、平和を創る取り組みを広げるため、「平和の灯」を灯しました。

この灯が市民の平和のシンボルとなり、多くの皆さんが命の大切さや平和の尊さを考え、平和の連鎖がより一層広がっていくことを願っています。